1926年27年における魯迅の民衆像と知識人像についてのノート（上）
――魯迅の民衆像・知識人像覚え書（1）

中　井　政　喜

Ⅰ、はじめに
一、　三・一八惨案と厦門行
二、1926年頃以前の民衆像と知識人像
三、『朝花夕拾』等について
Ⅱ、『朝花夕拾』『華蓋集続編』等における社会像・民衆像・知識人像等
一、社会像
二、民衆像（下等人像）
１、故郷（浙江省紹興）の民衆像
２、「平民」について（以上今号）
三、知識人像（以下次号）
四、まとめ
Ⅲ、四・一二クーデターの衝撃と国民革命の挫折
一、青年一般に対する、無条件の畏敬・信頼の破綻
二、自己の文芸に対する懐疑と課題
Ⅳ、さいごに

Ⅰ、はじめに

小論[*1]は、1926年27年の間における魯迅の、民衆像・知識人像等を検証することを目的とする。その場合、魯迅（1881-1936）における民衆像・

知識人像等の変遷を前提としている。また、その間に起こった1927年四・一二クーデターが魯迅の文芸と民衆との関係、魯迅の文芸と進化論との関係等に、いかなる影響を与えたのか、についても言及する。小論は、魯迅の民衆像・知識人像を歴史的に見ていくための一環の役割をもつ。

上記の目的のために、まず1926年以前の時期の、民衆像・知識人像にかかわる点を確認する。

一、三・一八惨案と厦門行

以前私は、「魯迅の復讐観について」（『野草』第26号、中国文芸研究会、1980・10）で、1926年の三・一八惨案において魯迅がどのような影響を受けたのか、に触れたことがある。それ以前、魯迅は中国変革の主要な当面の課題が国民性の悪の改革（精神改革、思想改革）にある、と考えていた。この事件をつうじて魯迅は、それにくわえて一層緊急の課題が、国民性の悪を現実に体現し、中国変革を凶暴な武力によって阻む軍閥の支配体制にあると考え、またそれと結託する知識人の役割に注視するようになる、と推測した。そしてこの事件によって魯迅に沸きおこった心情は、教え子の死に対する負い目をべつにすれば、軍閥政府とそれに結託する知識人に対する激しい憎悪であった。その憎悪は、これ以前における旧社会全体に復讐を計ろうとする挫折した改革者としての憎悪とは内実を異にして、中国変革への指向をはっきりと内包していた。魯迅は、中国変革の課題として国民性の悪の改革という精神次元の課題にくわえて、一層緊急で具体的な権力構造の変革の課題について認識を深化させた[*2]。

言い換えると、権力構造についての認識の深化は、魯迅が1925年頃の女師大事件において軍閥政府を後ろ盾とする校長側と具体的に戦い、そして上述のように三・一八惨案での軍閥政府の凶暴な支配権力を経験したことによると思われる。これまで中国変革の主要な課題と位置づけられてきた国民性の悪の改革を、とりわけ1926年3月18日以降、課題の緩急の観点から位置づけを決定的に変化させたものであると考える。中国人の国民性の

悪は、依然としてそれ自体として存在し、それ以後も中国変革の一つの課題として提起され、あるいは変革の主体の形成の問題として存在した。しかし横暴な軍閥支配の権力構造の変革を、より緊要な現在の問題として検討する必要性が、1926年3月18日以降、明瞭に魯迅に意識された。

三・一八惨案以後、軍閥政府はひそかに李大釗等五名の逮捕令を出し、また五〇名（一説には四八名）*3のブラックリストをつくり、軍警に密かに逮捕を命じたことが伝えられた。このため、魯迅は3月26日にしばらく身を隠し、5月2日に避難生活を終えて帰宅した。その後、魯迅は1926年8月26日に許広平とともに北京を離れ、厦門大学に向かう（許広平は途中で魯迅と別れ、任地の広州に向かった）。

このとき魯迅は厦門大学への赴任（国文系教授兼国学院研究教授）を、一時の休養と位置づけ、次の活動のための準備とした*4。しかし魯迅は、厦門で孤独に陥り、あまりにも閑静で刺激の少ない厦門大学に見切りをつける*5。魯迅は、1927年1月16日に厦門を離れ、中山大学に赴任するため、広州に向かった。国民革命の「策源地」広州についたのちは、新たな活動を意図していた*6。

二、1926年頃以前の民衆像と知識人像

中国の民衆と知識人（読書人）は、魯迅の意識の中で切り離しがたいものだったと思われる。中国変革の課題に関連して、民衆観の側面から言うならば、民衆に対する認識の深化、そしてそれを魯迅に可能にする状況は、1925年半ばから出現しつつあった。

初期文学活動（1903–09年）の諸論文におけるように、両者の関係は指導と被指導の関係という指導者意識が前面にでる場合があった。そのときに民衆は愚民と「素朴な民」（「朴素之民」、「破悪声論」、1908・12・5発表、『集外集拾遺補編』）の姿をとって現れた。

初期文学活動の失敗と辛亥革命（1911年）の挫折以降、挫折を体験した改革者魯迅の意識の中で、愚民は旧社会における麻痺した目覚めぬ民衆の

姿をもって現れる。同時につねに、何らかの形で中国変革を志した魯迅は、民衆の中に変革の担い手の可能性をもつ「素朴な民」（前掲）を当為として想定している（「我們現在怎様做父親」、1919・10、『新青年』第6巻第6号）。言い換えれば、魯迅は、当為としての素朴な民を想定し、将来的変革の担い手として民衆を視野に入れながら、同時に大部分の民衆の麻痺した現状に反発・批判するものであった。この時期の魯迅の民衆観は、「『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長」（「『魯迅景宋通信集』二四」、1925・5・3、『魯迅景宋通信集《両地書》的原信』、湖南人民出版社、1984・6）の過程を構成する一環としてあった。

しかし魯迅は1925年5月、民衆の沈黙の現状に対する弁護（「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」、1925・5・26、『集外集』）を述べた[*7]。1925年10月17日の「孤独者」（1925・10・17、『彷徨』）において魯迅は、挫折した改革者としての旧社会全体に対する復讐感からの、自新のためのカタルシスを基本的にとげた[*8]。1926年1月において、民衆について魯迅は次のように考えた。中国の民衆は、現状において目覚めぬ民衆として存在しながらも、しかし歴史上、王朝･社会が混乱をきわめた時期において、農民蜂起を起こし、農民革命軍となる可能性をもった存在である（「学界的三魂」、1926・1・24、『華蓋集続編』）、と。女性については、1925年の女師大事件において、女性知識人の戦う力量に対して高く評価するようになった（「記念劉和珍君」、1926・4・1、『華蓋集続編』）[*9]。

上記の過程をへて、それ以前の、挫折した改革者の視点から見る国民性の悪を一身に体現する民衆像（愚民）ではなく、また中国変革を志す改革者の目から見る当為としての民衆像（素朴な民）でもないような、あるがままの民衆像を、追究しようとする姿勢が、すなわち当時の旧社会において、封建勢力・軍閥が支配する旧社会の中において、現実に生活する民衆の姿をあるがままに見ようとする姿勢が、1926年頃魯迅にいっそう強化されたと思われる。

そして知識人（作家）としての自らの生き方に対する内省と追求の契機

も、1926年頃、国民革命の進展という状況があって、ここに改めて魯迅に生じたと思われる。また1926年頃魯迅は、ロシア十月革命前後の過渡期知識人（ブローク、ソーボリ、エセーニン等）の苦悩に対する共感を隠さなかった。

三、『朝花夕拾』等について

こうした上述の1926年頃の魯迅の営為を明瞭に反映するものが、第一に、『朝花夕拾』（北京未名社、1928・9刊、1926年2月21日作から同11月18日作までの作品を収める）の諸作品における民衆像である。そしてそれは魯迅が1926年の時点で、過去（少年時代）におけるあるがままの現実の民衆を認識しようとしたものであると考える（例えば、「阿長与『山海経』」〈1926・3・10〉）。すなわち1926年に現れる民衆像は、それまでの民衆観の変遷の過程のうえに立って出現したものと考える。私は、1926年新たに出現したこの民衆像に焦点をあてる。第二に、『朝花夕拾』（同上、1928・9）において、過去（青年時代）における知識人像が追究された（例えば、「藤野先生」〈1926・10・12〉、「范愛農」〈1926・11・18〉）。それは、魯迅が自らの生き方（過渡的知識人としての生き方）を内省し追求し、「休養」（「『魯迅景宋通信集』一一六」、前掲）から再起するための営為、過渡的知識人像の新たな追求が背景にあったと思われる。

私は、語り手が『朝花夕拾』において中国の民衆像・知識人像をどのようなものとして語っているのか、という観点から見ていきたい。私は『朝花夕拾』が魯迅の回想の側面をもつことを認めつつ、主として1926年における語り手の語りかたに注目することにする[*10]。

また同時に、翌年の1927年四・一二クーデターによって魯迅がどのような衝撃を受けたのかという点も、追究する。1928年から始まる革命文学論争の前段階における、文芸の背景をめぐる問題（進化論等の位置づけ、民衆に対する文芸の作用等）に関して、魯迅の考え方の一端を明らかにしたい。私は、魯迅が三・一八惨案で受けた影響と四・一二クーデターで受

けた影響とが、質を異にしていると考え、これを区別する。

Ⅱ、『朝花夕拾』『華蓋集続編』等における社会像・民衆像・知識人像等

1926年27年頃に執筆され、後に編集された雑文集『華蓋集続編』（北京北新書局、1927・5）、『而已集』（上海北新書局、1928・10）、『三閑集』（上海北新書局、1932・9）の文章の中にも、この頃の魯迅の民衆像・知識人像が表現され、またその社会像を窺うことができる。『朝花夕拾』（北京未名社、1928･9）を中心としながら、これとあわせて、これを補うものとしてこの第Ⅱ章で取りあげたい。

一、社会像

1926年27年頃における魯迅の中国旧社会像は、1925年頃の社会像を基本的に引きついでいる。それと同時に、1927年1月魯迅が厦門から広州に移動する際、イギリス植民地香港を通過したこと、またその後香港で講演を行い、香港の新聞にも目を通すようになったことから、魯迅の予想する将来の中国社会像に、支配者としての外国人がはじめて登場する。

まず、1925年頃の社会像を基本的に受けついでいる点から見ていく。

「一面では礼楽を制定し、孔子を尊び経典を読み、〈四千年、文物の邦を声明〉して、まことに火加減も良いところになっている。しかし一面では平然と、放火・殺人をし、姦淫・略奪をして、蛮人であっても同族にしようとしないことをしている……中国全土は、このような一大宴席である。」（「馬上支日記」、1926・7・4、『華蓋集続編』）

当時の中国旧社会を、爛熟した文明と極端な蛮行が混在する、弱肉強食の一大宴席とする。

「一点比喩」（1926・1・25、『華蓋集続編』）で、中国旧社会は山荒らしと棘のないもので構成される社会に喩えられる。

「たとえこのように叫んでも〔“Keep your distance!”――中井注〕、おそらく

山荒らしと山荒らしの間で効力がありうるだけだろう。なぜなら彼らがお互いに距離を保つのは、その理由が痛いことにあり、叫ぶことにはないからである。もしも山荒らしの中に別なもの、棘のないものが交じっていれば、どのように叫んでも、彼らはやはり体を押しつけてくる。孔子は、礼は庶人に下らず、と言う。現在の状況から見ると、庶人が山荒らしに近づいてはならないのではなく、山荒らしは勝手に庶人を刺して暖を取ることができるとすべきである。負傷することは当然負傷しなければならない。しかしこれも自分だけに棘がないことを責めなければならず、適当な距離を彼に守らせるには足りない。孔子はまた言う、刑は大夫に上らず、と。これではまた、人々が紳士になろうとするのも無理はない。

これら山荒らしは、もちろん牙、角や棍棒で防ぐことができる。しかし少なくとも山荒らし社会の定める罪名、〈下流〉あるいは〈無礼〉という罪名を、必死に背負わなければならない。」(「一点比喩」、1926・1・25、『華蓋集続編』)

中国旧社会は、金持ち・紳士階層(山荒らし)が庶民(棘のないもの)をできるかぎり搾取することのできる社会であり、それに抵抗すれば〈下流〉等の罪名を背負わなければならない。旧社会は、金持ち・紳士の支配層がほしいままに庶民を食い物にする社会であるとする。こうした社会構造についての分析の仕方は、基本的に1925年の「灯火漫筆」(1925・4・29、『墳』)、「春末閑談」(1925・4・22、『墳』)の考え方を踏襲するものと言える。ただ、より明確に、支配者層(金持ち・紳士階層)と被支配者層(庶民)が分離され、抑圧と被抑圧、搾取と被搾取の関係が、また抑圧者を擁護する中国旧社会の諸関係(「礼は庶人に下らず、刑は大夫に上らず」、『礼記』「曲礼上」)が、明瞭に述べられる。

さらに魯迅は、1927年1月、厦門から広州への途次に香港を通過し、香港の中国人税関吏の行為を見たこと、あるいはその後香港の新聞で読んだ記事の内容等に基づいて、将来の中国社会像を次のように予想する*11。

「ほかのところは知りませんので、上海によって類推するしかありませ

ん。上海では、もっとも権勢をもつものが一群の外国人であり、彼らに近づき取りまくものは中国の商人といわゆる知識をもつ人です。その輪の外は多くの中国の苦しむ人々であります。すなわち奴隷根性をもった下層の人々です。将来、もしも古い調子をなお歌い続けるならば、上海の状況は全国に拡大し、苦しむ人々は多くなることでしょう。」(「老調子已経唱完」、1927・2・19、『集外集拾遺』)

ここで魯迅は、上海を取りあげ論ずるとするが、しかしこれは香港の現状でもあった。中心に支配者である一群の外国人が存在し、その周りに中国人の商人と知識をもつものが存在する。その外周りに、中国の苦しむ人々(原文、「下等奴才」、奴隷根性をもつ下層の人々)が存在する。将来中国はこのような構造をもつ社会となる。これを避けるために、魯迅は旧文章・旧思想を捨て(礼教による旧文化の支配から脱却して)、現在の民衆とかかわりのある、現在の社会と関係のある文化をつくらなければならないとする(「老調子已経唱完」、1927・2・19、前掲)。

このように、1926年、27年の前半における魯迅の社会像は、基本的に1925年の、抑圧層と被抑圧層に二分される社会像を引き継ぎ*12、抑圧層を擁護する旧社会の諸関係を鮮明にしながら、そのうえで将来における旧社会の中心に外国人の支配が存在する危険性を示唆する(「述香港恭祝聖誕」、『語絲』第156期、1927・11・26、『三閑集』)。

二、民衆像(下等人像)

1、故郷(浙江省紹興)の民衆像

『朝花夕拾』(北京未名社、1928·9)において、語り手魯迅は子供時代におけるあるがままの民衆の姿を語る。例えば、「阿長与『山海経』」(1926・3・10、『朝花夕拾』)で語り手魯迅は次のように子ども時代の乳母の思い出を語る。

「陰で人の長短を言うのは良いことではないけれども、もしも本当のことを言えば、私は次のように言うしかない。実際あまり彼女〔阿長――中井

注〕に感心しなかった。」（「阿長与『山海経』」、1926・3・10、前掲）

乳母の阿長はひそひそ話が好きで、低い声で人に何かをくどくどと言い、人差し指をたてては、上下に動かし、相手をさしたり自分の鼻をさしたりしていた。語り手はこれが最も嫌いだったと言う。家に波風が立つと、このひそひそ話に関係があると疑った。

夏には、阿長は大の字に寝て、語り手が寝返りも打てないほどベッドの隅に押しこめた。

阿長は、たくさんのしきたり（風習）に詳しく、語り手には面倒なものであった。春節の朝に起きたとき、真っ先に、語り手は「阿長、おめでとう」と言い、「福橘」（福建のみかん）を食べなければならない。人が死んだら、死んだと言ってはいけない、必ず「老掉了」（亡くなった）と言わなければいけない。人が死んだり、子供が生まれた部屋に入ってはいけない。ズボンを干す竹竿の下は、決してくぐってはいけない。面倒きわまりないものだった。

しかし長毛の話（太平天国の乱）を阿長から聞いて、彼女の神通力に大変感心した。

隠鼠の死を悲しみ、猫に復讐していた頃、また『山海経』に憧れていた。それは玉田老人から聞いたもので、しかしそれを見たり、手に入れる方法がなかった。ある日、阿長は暇をとり、四五日実家に帰っていった。戻ってくると、阿長は木刻の「『三哼経』」（『山海経』のこと、「阿長与『山海経』」、1926・3・10、前掲）を手渡してくれた。四冊本で、印刷の粗末な、紙も黄いばんだものだった。挿絵は直線をつなぎ合わせたもので、眼は長方形だった。しかしそれは魯迅が最も愛した宝の本となった。

「ほかの人がやろうとせず、或いはできないことを、彼女はやりとげることができる。」（「阿長与『山海経』」、1926・3・10、前掲）

このように、ユーモアと皮肉を交えながら、子供の目から見た一人の民衆阿長を、しきたりや縁起かつぎの面倒なことから、語り手の渇望した本を買ってくれるという心優しさまで、あるがままに描きだしている。

「寛大にして暗黒の地母よ、あなたの懐に彼女の魂をとこしえに休めたまえ。」（「阿長与『山海経』」、1926・3・10、前掲）

このようなあるがままの民衆像が、これまで魯迅の作品の中で、対象から一歩距離をとった形で描かれたことはなかった。語り手は旧社会の中で、紹興の魯迅の家で、働き生活していた一人の民衆の姿を、子どもの目から見えるあるがままの民衆の姿を、描いている。1925年以前に出現する、当為としてある朴素の民の純粋さではなく、憎悪の対象である愚民としての麻痺した姿でもないような、1926年の生き生きとした民衆は、魯迅の作品の中ではじめて出現している[*13]。

1926年3月10日という時点で、あるがままの民衆が、回想の形式の中に現れた。それは、あるがままの民衆を認識し受け容れよう、という魯迅の心情にほかならないと思われる。またそれは、「離婚」（1925・11・6、『彷徨』）における、反抗闘争し敗北せざるをえなかった新しい民衆の類型、「反抗の原初形態」[*14]の萌芽を示す農村女性愛姑の敗北を確認した後、故郷におけるあるがままの民衆を、民衆の精神を、回想の中で探究しようとする試みと思われる[*15]。

魯迅はまた、「無常」（1926・6・23、『朝花夕拾』）において故郷の民衆の心理を語る。ここで言う「無常」は活無常のことを指し、民間信仰で魂を抜きとるために訪れる冥界の使者である。

「人々は活無常を見ると、なぜいささか緊張し、しかも喜ぶのだろうか。」（「無常」、1926・6・23）

「彼ら――我が同郷の〈下等人〉――の多くは、生きて、苦しみ、噂を流されて、逆ねじを食らわされる。長い間積み重ねた経験によって、この世で〈公理〉を維持するのはただ一つの会しかないことを知り、しかもこの会自体は『はるか茫々たる』ものであり、そこでいきおい冥界に対するあこがれが生じざるをえないこととなる。人はたいてい不当な取りあつかいを受けていると思っている。生ける〈正人君子〉はくそ野郎を騙すことができるだけで、もしも愚民に問えば、彼は考える間もなく答えるはずであ

る。公正な裁判は冥界にある！と。」（「無常」、1926・6・23、前掲）

ここでは、語り手は「愚民」という言葉を使う。しかしここでそれは、挫折した改革者の憎悪の対象としての愚民ではなく、或いはニーチェの言う〈愚民〉ではなく、この旧社会に生きて苦しみ、噂を流されて、逆ねじを食らわされる民衆、〈下等人〉のことを言う。それは、〈正人君子〉とは対照的な存在である[*16]。

この〈下等人〉こそ、魯迅がそれ以前の時期に想定していた〈素朴な民〉と〈愚民〉が止揚される過程にあって、彼の目の前に見えてきた、旧社会の中で現実に息づき生活する、現実の民衆に近い姿をとって現れたものであり、語り手は彼らの心情を叙述しようとしていると思われる。ここで語り手は、民衆にとって公正な裁判は冥界にある、という彼らの気持ちを推測している。このような民衆の気持ちに、これまで魯迅が言及したことはなかった。語り手は民衆の気持ちに共感し、より添い、感情移入している。

「生の楽しみを思えば、生はもとより未練に値する。しかし生の苦しみを思えば、活無常は必ずしも悪い客ではない。貴賤を問わず、貧富にかかわりなく、そのときにはすべて『空手で閻魔大王にまみえ』、無実の罪のものはそれを晴らすことができ、罪のあるものは罰をうる。しかし〈下等人〉ではあるけれども、どうして反省がないことがあろうか。自分はこの一生に人として、どうだったのか。『空の半ばまで飛び上』がらなかったか。『冷箭を放』たなかったか。」（「無常」、1926・6・23、前掲）

「まだ亡魂にならないうちに、自らを欺かない人は時には、はるかな先の将来を考え、公理のかたまりの中で、いささかの情実のかけらを捜そうと思わずにはいられない。このとき、私たちの活無常先生は親しいものに見える。有利なことを大きく取りあげ、不利なものを小さくあつかう。」（「無常」、1926・6・23、前掲）

善良ではあるけれども、罪を犯さなかったわけではない民衆が、生きているうちに自分のはるか先の将来を考え、冥界のわずかな情実をあてにできる活無常に、深い親しみを感ずる、と言う。これも語り手が、民衆の気持

ちを推しはかったものであると思われる。

1926年頃以前においては、魯迅がこうした民衆の気持ち自体を忖度することはなかったと思われる。1926年頃以前であれば、民衆が冥界を信じて活無常の情実をあてにすること自体が、目覚めぬ民衆の在り方として魯迅の批判の対象となった可能性を否定できない。*17

「私は今でもはっきりと覚えている。故郷にいるとき私は、〈下等人〉とともにいつも喜んで、亡魂にして人間、理にして情、怖くて愛すべきこの活無常を、目をそらすことなくまっすぐに見ていた。そして彼の泣き顔や笑顔や、口からでる強硬な言葉と諧謔……を楽しんだ。」(「無常」、1926・6・23、前掲)

「およそ〈下等人〉には一つの通弊がある。いつも己の欲することをもって、これを他人に施すことを好むことである。亡魂に対してではあっても、彼を寂しがらせることを承知せず、あらゆる鬼神には、たいてい必ず一対一対になるように配偶者をあてようとする。」(「無常」、1926・6・23、前掲)

「料理を献げるという一幕は、『活無常を見送る』ものである。彼は魂を抜く使者であるので、民間ではおよそ人が死んだ後、酒食によって彼をうやうやしく送る。彼に食べさせないというのは、それは賽会のときの冗談であり、実際は決してそうではない。しかし活無常をからかうことについては、みんながこの気持ちをもっている。なぜなら彼は率直で、議論好きで、人情があるから――真実の友達を求めようとするならば、むしろ彼はふさわしい。」(「無常」、1926・6・23、前掲)

語り手は活無常が、民衆の中で愛され、怖がられ、民衆の中に息づいてきたことを物語る。そして民衆は活無常をからかおうとする。活無常は率直で、議論好きで、人情があり、本当の友達になることができるような、亡魂であるから、と言う。このように見てくると、活無常は、民衆精神の一面の化身であると思われる。

ここで語り手魯迅は、自分の理解する現実の民衆の姿の一面を、あるが

ままに共感をこめて描きだそうとしている。故郷の民衆と自らとの間には、精神的に共有するものがあることを確認している。それは活無常に体現された人間像、活無常と民衆の間に体現された人間関係、民衆の姿の一面に対する共感である。

前述した1926年頃以前の事情を踏まえて言うならば、1926年頃から魯迅は、改めて現実の中国の民衆の、あるがままの姿を測り直し、あるがままの心情を理解しようとしたと思われる。一歩進めて言えば、下層の民衆の一面に対する魯迅の共感は、女師大事件（その後の三・一八惨案）において軍閥政府そしてそれと結託する知識人と戦い、その結果民衆と同じように抑圧を受け、傷ついた者としての、彼の共感と感情移入の色あいが含まれる。

しかしながら魯迅は、当時の民衆の、別の側面に現れる現状に目をつぶったり、楽観したのではないと思われる。

「もしも天才がいて、時代の鼓動を真に感じて、11月22日、このような情景を記述する小説を発表するとしたら、多くの読者はきっと包龍図旦那*18の時代のことを言っているのだ、と思うであろう。その時代は西暦11世紀、私たちとは九百年隔たるであろう。」（「阿Q正伝的成因」、1926・12・3、『華蓋集続編』）

1926年11月23日の『世界日報』の記事を引用し、上のように述べる。新聞に現れる世間の様子（死刑執行をめぐる刑場と民衆の様子）が、900年前の時代を描いたものと変わらないことを言う。死刑執行をめぐって現れる中国の民衆の気風は変わるところがなかった。

「私は劉半農を〈乱党〉に強いて比べようとするのではない。（現在の中華民国は革命によって作られたのであるけれども、しかし多くの中華民国の国民は、依然としてあの時の革命者を乱党であるとしていることは、明々白々である。）ただ、いまの時において、かつてのことを回想して、数人の友人に思いたり、自分が依然として無力であると感じることを言うにすぎない。」（「為半農題記『何典』後、作」、1926・5・25、『華蓋集続編』）

民衆は依然として中華民国建国の革命の意義を理解していなかった。こうした民衆の精神の現状、気風に対する改革の課題は事実として存在し、魯迅はそのことを忘れたことがなかった、と思われる。

中国民衆に対する魯迅の心情は、辛亥革命挫折以後から1924年25年頃以前において、挫折を体験した改革者、それでも中国変革の希望を忘れることができなかった改革者の視点から見る、愚民と素朴な民に対するものであった。

1925年26年頃魯迅は、民衆の現状に対する弁護と潜在的力量についての認識を語り、その後、1926年頃から、回想をつうじて過去における現実の民衆像に接近をはかりつつ、民衆の事実に対するあるがままの認識（肯定的面と否定的面も含めて）をもとうとし、ときには共感と感情移入も生じている、と言える。それは、挫折を体験した改革者の視点から見る、憎悪の対象としての愚民と当為としての素朴な民という、以前の民衆像の構造を止揚していくための準備段階であった。すなわちそれは、魯迅にとってはじめて出現するあるがままの民衆像であり、そののち1927年以降、とりわけマルクス主義を本格的に受容していく1928年以降において、現実の民衆をあるがままに観察し受け入れ、分析批評し考察し、あらためて民衆像を構成していくための準備段階をなす性格をもつものであったと思われる。

２、「平民」について

国民革命の高揚したこの時期にはまた、「平民」についての言及（例えば、「『争自由的波浪』小引」〈1926・11・14、『集外集拾遺』〉）が現れる。この時期の「平民」という用語は、1917年ロシア十月革命の状況と関連して使われる。「平民」とは、「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』）によれば、労働者農民（原文、工人農民）のことである。ロシア革命の過程における、ロシアの平民と知識人の在り方を紹介することをつうじて、魯迅は中国変革の過程において、中国の「平民」の存在と「知識人」の生

き方について考えようとしたと思われる*19。

「ある人々は今になってもロシアの上等人のために不平を鳴らし、革命の光明のスローガンは、実際には暗黒のものとなったと考える。これもおそらく真実であろう。改革のスローガンは必ずや光明のものである。この本に収められたいくつかの文章が書かれた時代において、たいてい改革者はあらゆる人々に平等の光明を広く与えたいと考えた。しかし彼らは拷問を受け、幽閉され、流刑にあい、殺された。平等に与えようとしても、不可能なことである。（中略）

中国に平民の時代がありうるかどうか、もちろん断定しようがない。しかし、要するに、平民が命を捨てて改革をした後、必ずしも上等人にフカヒレの宴席を設けるものではないことは、見やすいことである。なぜなら上等人はこれまで平民に雑穀の食事を設けたことがなかったからである。」（「『争自由的波浪』小引」、1926・11・14、『集外集拾遺』）

「平民」（労働者農民）が権力をとる時代に、それ以前苛酷な支配を行った「上等人」が優遇されることはありえない。改革者が拷問され、圧迫された以上、それを行った上等人に対して平等に光明を与えることは、不可能なことである。中国において、平民の時代が来るとすれば、上等人にフカヒレの宴席を設けることはない。なぜなら上等人はこれまで平民を抑圧し、雑穀の食事を用意したことさえなかったからである。

「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』）において、魯迅は「平民」と「平民文学」の関係について次のように言及する。

「現在、ある人が平民――労働者農民――を材料として、小説を書き詩を作りますと、私たちはこれも平民文学だと言っていますが、しかし実はこれは平民文学ではありません。というのも平民はまだ口を開いていないからです。これは、ほかの人が傍らから平民の生活を見、平民の口ぶりを借りて語ったものです。（中略）現在中国の小説と詩は実際他国と比べものになりません。しかたなく、これを文学と称するほかありません。革命時代の文学とは言えませんし、平民文学とはなおさら言えません。現在の文

学者はみな読書人です。もしも労働者農民が解放されないならば、労働者農民の思想は依然として読書人の思想です。労働者農民が真の解放を獲得して、その後にこそ真の平民文学が存在します。」（「革命時代的文学」、1927・4・8講演、『而已集』）

「平民文学」は、平民（労働者農民）が解放されたあと、平民の手によって作られるものである、と魯迅は考えている。ゆえに現在中国には、「平民文学」はない、と言う[*20]。

「ロシアでは革命以前も、知識階層〔原文、知識階級、以下同じ――中井注〕が社会で歓迎されました。なぜ歓迎されたのでしょうか。知識階層が平民のために不平をもち、平民の苦痛を大衆に告げることができたからです。知識階層がなぜ平民の苦痛を語ることができたのか。知識階層が平民に近づいたり、あるいは彼ら自身が平民であったからです。」（「関于知識階級」、1927・10・25、『集外集拾遺補編』）

ロシアの知識人は平民（労働者農民）に近づき、あるいは彼ら自身が平民出身であった。ロシアの知識人は「平民の苦痛を大衆〔原文、大衆――中井注〕に告げ」（188頁）た（「大衆」は被抑圧階級の広い勤労者階層を指すのであろう）。

では、中国において平民（労働者農民）と知識人の関係は、その連帯は、どのようなものでありうるのか。中国知識人はどのように平民を啓蒙しうるのであろうか。これは、過渡的知識人の魯迅における一つの大きな課題であった。1926年、27年において平民との直接的連帯の道をもたなかった魯迅は[*21]、自己限定的な連帯の道（有島武郎のように）をとろうとした[*22]。

「平民」（労働者農民）とは、1927年頃当時、魯迅が中国変革を1917年ロシア十月革命を参考として理論的に、また将来の展望において革命の担い手等の問題を考えようとするとき、回想の中の体験的民衆像とは別に、新たに出現した概念であったと思われる。この「平民」の概念がどのように現実の中国民衆と関連をもつようになるのか、或いはならないのか、を1928年以降に見ていかなければならない。

注

*1：私が目をとおした小論の主題に関する論文等は次のものにとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

〔中国語文献〕

①『回憶魯迅』（馮雪峰、人民文学出版社、1952・8、底本は『魯迅巻』第8編〈中国現代文学社編〉）

②『〈朝花夕拾〉浅析』（紹興魯迅紀念館等編、福建人民出版社、1978・6）

③「略論魯迅思想的発展」（李沢厚、『魯迅研究集刊』第1輯、上海文芸出版社、1979・4）

④「論魯迅馬列主義世界観的確立」（厳家炎等、『魯迅研究集刊』第1輯、上海文芸出版社、1979・4）

⑤「魯迅改造国民性思想問題的考察」（孫玉石、『魯迅研究集刊』第1輯、上海文芸出版社、1979・4）

⑥「論『朝花夕拾』」（王瑶、1983・10・28脱稿、『魯迅作品論集』、人民文学出版社、1984・8）

⑦「関于魯迅的思想発展問題」、陳涌、『魯迅論』（人民文学出版社、1984・5）

⑧「雍容・幽黙・簡単味――『朝花夕拾』風格論」（温儒敏、『魯迅研究月刊』1989年第12期、底本は、『魯迅其書』〈張傑等編、社会科学文献出版社、2002・3）

⑨「文化・文献・審美――『朝花夕拾』価値論」（李辰坤、『魯迅研究月刊』1998年第8期、底本は、『魯迅其書』〈張傑等編、社会科学文献出版社、2002・3〉）

⑩『与魯迅遭遇』（銭理群、生活・読書・新知三聯書店、2003・8）

⑪「第二講　魯迅筆下的両個鬼――読『無常』、『女吊』及其他」（銭理群、『魯迅作品十五講』、北京大学出版社、2003・9）

〔日本語文献〕

①「『藤野先生』」（竹内好、『近代文学』第9号、1947年2・3月合併号、1947・3、底本は『竹内好全集』第1巻、筑摩書房、1980・9・20）

②「解説」（竹内好、『魯迅選集』第2巻、岩波書店、1956・7・22）

③『魯迅と革命文学』（丸山昇、紀伊國屋書店、1972・1・31）

④「『朝花夕拾』の世界――その連続性について」（永末嘉孝、『九州中国学会報』第20巻、1975・5・24）

⑤「魯迅『藤野先生』の執筆意図について」（白井宏、『香川大学国文研究』第15号、1990・9・30）

⑥「頽れいく〈進化論〉――魯迅『死火』と『頽れおちる線の顫え』――」（丸尾常喜、『東洋文化研究所紀要』第117冊、1992・3）
⑦『ある中国特派員――山上正義と魯迅』（丸山昇、田畑書店、1997・6・15）

*2：「魯迅の復讐観について」（『野草』第26号、中国文芸研究会編、1980・10・31、後に、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第3章に所収）
*3：『魯迅年譜』増訂本（魯迅博物館魯迅研究室編、人民文学出版社、2000・9）による。
*4：魯迅は李秉中宛て書簡（1926年6月17日付け）で次のように言う
「現在まで、文章はやはり書いています。〈文章〉と言うより、〈ののしり〉と言ったほうがよいでしょう。しかし私は実際極度に疲労し、すこし休みたいと思い、今年秋、ほかのところへ行くかもしれません。場所はまだ決まっていません、おそらく南方です。目的は、一、もっぱら教授し、ほかのことに関わることを少なくします（しかしこれも分かりません、おそらく依然として言わなければならないでしょう）。二、数文のお金を稼ぎ、家の生活費にあてます、印税によるのは結局十分ではありませんので。」
　また、「『魯迅景宋通信集』一一六」（魯迅、1926・12・29、『魯迅景宋通信集《両地書》的原信』、湖南人民出版社、1984・6）で次のように言う。
「厦門大学は廃物です、言うに足りません。中山大学にもしするべきことがあれば、私もこのために力を出したいと思います。しかしもちろん自分の身を損ねないことを限度とします。私が厦門に来たのは、本意はしばらく休養し、そしてすこし準備することでした。」
それは、北京において青年文学者の育成のために払った献身的努力と、女師大事件における闘争と論戦、また三・一八以後の恐怖をともなった一時期の避難生活からの休養であったと思われる。
　「『魯迅景宋通信集』六四」（魯迅、1926・10・15、『魯迅景宋通信集』、前掲）で次のように言う。
「実際私はこの地で、或るグループの人が大変な名士と見なしています。北京での心中びくびくしたときと比較すると、ずいぶん平穏です。」
　許広平は「『魯迅景宋通信集』五六」（許広平、1926・9・30、『魯迅景宋通信集』、前掲）で次のように言う。
「学校〔厦門大学を指す――中井注〕は散漫で基金がなく、学生は少なく、様々のことが不備で、そうしたところでは当然関心が薄れます。しかし北京の暗黒

は、当分の間光明となるのは難しく、北伐軍が北京まで行くか、或いは国民軍が再び入城するかしないかぎり、私たちこの道の人間は、これを避けるのが吉です。このように考えると、いま私たちがいるところは、桃源に避難したものと言えます。」

*5：魯迅は、許寿裳宛て書簡（1926年10月4日付け）で厦門の生活を次のように言う。

「この間、授業はべつに多くありません、六時間だけです。二時間は教材を編集しなければなりません。しかし話すことのできる人がいなく、きわめて寂しいです。生活の費用を求めるために、苦労して疲れました。北京ではもとより生活の費用がありませんでしたが、まだ生活がありました。今は生活の費用がありますが、生活を失い、ことにまた無聊であります。」

魯迅はまた、学校側が高い給料にものを言わせながら、教員の生活環境に配慮することの少ない姿勢に反発し（例えば、「『魯迅景宋通信集』一一〇」、魯迅、1926・12・20、『魯迅景宋通信集』、前掲）、また着々と党派を根づかせる現代評論派〔顧頡剛を指す〕を嫌い（例えば、「『魯迅景宋通信集』七七」（魯迅、1926・11・3、『魯迅景宋通信集』、前掲））、自分を招聘してくれた林語堂の好意に感謝し配慮つつも（例えば、「『魯迅景宋通信集』七六」（魯迅、1926・11・1、『魯迅景宋通信集』、前掲））、厦門大学を去り、許広平のいる広州に向かう。

*6：「『魯迅景宋通信集』八〇」（魯迅、1926・11・7、『魯迅景宋通信集』、前掲）で次のように言う。

「実際私にもまだ野心があり、広州に行ったあと、研究系〔現代評論派を指す――中井注〕に打撃を加えたいと思います。たかだか北京に行くことができなくなるだけで、気にしません。第二に、創造社と連絡をとり、戦線を作って、旧社会に侵攻し、私はさらに努めて文章を作ることも、気にかけません。」

また、「『魯迅景宋通信集』九五」（魯迅、1926・11・28、『魯迅景宋通信集』、前掲）で次のように言う。

「この地〔厦門を指す――中井〕を離れたあと、私は農奴の生活を改めなければなりません。社会の方面のために、私は教育をするほか、これまでどおり継続して文芸運動をし、或いはさらに良い仕事をしたいと思います。」

*7：「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」（1925・5・26、『集外集』、『魯迅全集』第7巻、1981）は民衆の状況について次のように言う。

「現在私たちが聞くことのできるのは、数人の聖人の徒の意見や道理で、それらは彼ら自身のためのものである。庶民については、むしろ黙々と育ち、やつれ黄

色くなり、枯れ死にする、まるで大石の下の草のように。こうしてすでに四千年となる。」

「魯迅『離婚』についてノート――魯迅の民衆観等から見る」（『言語文化論集』第29巻第2号、名古屋大学国際言語文化研究科、2008・3・31）で私は、魯迅の1925年26年頃の民衆観の変化に言及したことがある。

*8：拙稿「魯迅『孤独者』覚え書」（『名古屋大学中国語学文学論集』第3輯、名古屋大学文学部中国文学研究室、1979・2、後に『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第6章として収める）

*9：「私が中国女性の仕事ぶりを見たのは、去年に始まる。少数ではあるけれども、その熟練徹底した、幾度挫折してもくじけない気概を見て、かつてしばしば感嘆した。このたび弾雨の中で互いに助けあい、命を落とすことさえ顧みなかった事実〔1926年三・一八惨案のこと――中井注〕は、中国女性の勇敢毅然さが、陰謀密計にあい、数千年にわたって抑圧を受けてきたにもかかわらず、結局失われることがなかった明証とするにたるものである。もしもこのたびの死傷者について将来の意義を尋ね求めるならば、その意義はここにあるであろう。」（「記念劉和珍君」、1926・4・1、『華蓋集続編』）

*10：『魯迅――その文学と革命』（丸山昇、平凡社、1965・7・10）は、周作人の『魯迅的故家』（上海出版公司、1953・3）『魯迅小説里的人物』（上海出版公司、1954・4）に拠り、『朝花夕拾』（同上、1928・9）が事実に基づかない点を指摘している（「范愛農」における抗議電報をめぐる話、「父親的病」における衍太太の話等）。また、『知堂回想録』（周作人、三育図書文具公司、1974・4、初版、1970・5）にも、『朝花夕拾』（同上、1928・9）には事実と異なる記述が存在する可能性があることが指摘されている。また、「藤野先生」における、仙台に当時中国の留学生がいなかったという記述について、『仙台における魯迅の記録』（仙台における魯迅の記録を調べる会、平凡社、1978・2・24）によれば、二高の学生施霖という中国留学生が魯迅の身近にいたことが明らかになっている。これらのことに留意しつつ、小論を進めることにしたい

『魯迅選集』第2巻（岩波書店、1956・7・22）「解説」（竹内好）は次のように、『朝花夕拾』が「作品としての性質が強い」ことを指摘する。

「発想的には『〈吶喊〉自序』からさかのぼって、精神形成史を再構成したと見られるふしがある。したがって、この連作は、自伝としての性質より、多分に作品としての性質が強い。論争の要素と、追憶の要素と、作品の要素と、あわせて民俗的考察の要素とが、それぞれの量の多少の違いはあるが、入りまじっている。

一見混沌たる中に、独特の風格がかもし出され、魯迅の作品群中の異色篇となっている。」

それに対して、「論『朝花夕拾』」（王瑤、1983・10・28脱稿、『魯迅作品論集』、人民文学出版社、1984・8）は、『朝花夕拾』を、魯迅の一生の史実な第一次資料とする。

「歴史的文献として、当然まず魯迅が書いた事実は信用できると肯定しなければならない。」（172頁）

そのうえで、「論『朝花夕拾』」（前掲）は、周作人の『知堂回想録』であげられた、事実と違う内容（虚構）を検討する。「論『朝花夕拾』」（前掲）は、魯迅の次の言葉を引用する。『朝花夕拾』の内容は、「記憶の中から書きだしたもので、実際とはいささか異なるかもしれない、しかし私は今このようであると覚えているにすぎない。」（「『朝花夕拾』小引」、1927・5・1）このことに基づき、「論『朝花夕拾』」（前掲）は、「記憶の中から書きだしたもので」ある以上、想像や虚構を交えることはありえないとする。すなわち魯迅が意図的に虚構を交えたことはない、事実と違うとすれば、記憶の間違いに属する、とする。

しかしもし事実と違う場合、それが虚構か、それとも記憶の間違いかは、魯迅以外の他人には判断のしようがない。そして随筆という文章の性格から言えば、虚構の可能性を排除できない、と私には思われる。

李霽野は『魯迅先生与未名社』（湖南人民出版社、1980・7）で次のように言う。

「この時期、私は数篇の短文を書いたにすぎない。書き終わるといつも先生に郵送して見てもらった。今では自分自身が題すらも思いだすことができない。しかし先生が英国のEssayを多く読むと良いようだ、と勧めてくれたのをまだ覚えている。というのも彼はその時ちょうど厨川白村の『象牙の塔を出て』を訳していたところであり、その中には英国のこの種の文体に論及する文章があったからである。魯迅先生の教えによって、私は比較的多くこの種の文章を読み、『象牙の塔を出て』の文章スタイルにも、新鮮さと瑞々しさを感じた。」（『魯迅先生与未名社』、湖南人民出版社、1980・7、「一　魯迅先生対文芸嫩苗的愛護与培育」）

「私たちはまた魯迅先生と《象牙の塔を出て》の文章のスタイルのことを話したことがある。私たちは言った。先生の書いた『“フェヤプレー”はゆっくりとするべきことの論』等の雑文や、さらには『犬・猫・鼠』のような新境地を開いた回想の文章も、この本の影響をいささか受けているように見えます。しかし思想的意味の深さと広さ、革命の経験を総括する科学性や、粘り強い闘争を堅持する

激情は、《象牙の塔を出て》が並ぶことのできるものではありません、と。先生も否定しなかった。」（前掲、「六　未名社出版的書籍和期刊」）
厨川白村は「象牙の塔を出て、(2) エッセイ」（『象牙の塔を出て』、福永書店、1920・6・22、定本は『厨川白村全集』全6巻、改造社、1929、『出了象牙之塔』、魯迅訳、北京未名社、1925・12）で次のように述べる。
「冬ならば暖炉のそばの安楽椅子にでも凭れて、夏ならば浴衣がけに苦茗を啜りながら打寛いで、親しい友と心おきなう語り交わす言葉を其儘筆に写したようなのがエッセイである。興が向けば肩の凝らない程度の理屈も言おう、皮肉も警句も出るだろう。勝手な気焔も吐くだろう。ヒュウモアもあればペイソスもある。語る所の題目は天下国家の大事は申すまでもなく、市井の雑事でも書物の批評でも知人の噂でも、さてはまた自分の過去の追憶でも、思い浮かぶが儘を四方山の話にして即興の筆に託した文章である。」
魯迅は、基本的に過去の事実をたどりつつも、しかし稀には史実を離れている。これについて、厨川白村の随筆風の書き方が『朝花夕拾』の主たる方法となっていることに、その原因の一つがある、と私には思われる。
*11：『魯迅年譜』第2巻（人民文学出版社、1983・4）によれば、魯迅は1927年1月17日、厦門から広州への途次、香港を通る。同年2月17日、香港へ出かけ、講演をする。「無声之中国」（1927・2・18、『三閑集』）、「老調子已経唱完」（1927・2・19、『集外集拾遺』）は、その時の講演である。
*12：魯迅は「灯火漫筆」（1925・4・29、『墳』）で次のように言う
「いわゆる中国の文明とは、実際には金持ちに食べさせるために手配りされた人肉の饗宴にすぎない。いわゆる中国とは、実際には人肉の饗宴を手配りする台所にすぎない。」
魯迅は1925年において、虐げ同時に虐げられる人間の縦の系列を指摘しつつ、圧迫者＝金持ち（苦しめる者・虐げる者）と被圧迫者＝貧乏人（苦しめられる者・虐げられる者）という関係において、中国社会を理解している。このことについて、「労働者セヴィリョフ」との出会い（試論）〈下〉」（『野草』第24号、中国文芸研究会編、1979・10・1、のち『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1〉の第2章として所収、この本の注14）の注で述べたことがある。
*13：「阿長与山海経」（1926・3・10、『朝花夕拾』）には現実から一歩退いて、客観的に眺めようとする姿勢、あるがままの民衆を眺める姿勢がある。その結果として社会批評、文明批評も生じ、ユーモアも生みだすような姿勢が、窺われる。それ以前の「故郷」（1921・2、『吶喊』）における閏土は、純粋な子どもの姿（素

朴な民として）から、再会したときには、困難な生活に苦しむでくの坊のような農民になっていた。そして語り手とは越えがたい障壁に隔てられていた。そこには、失意の改革者魯迅の旧社会全体（「主犯なき無意識の殺人集団」〈「我之節烈観」、1918・8・15発表、『墳』〉）に対する憤激が窺われる。「故郷」の楊二嫂は、こすからく立ち回り、わずかな利益を得ようとする。そこにも失意の改革者魯迅の憤激の心情を窺うことができる。愛姑（「離婚」、1925・11・6）の反抗と闘争の失敗にも、魯迅の憤激の心情の影がある。「社戯」（1922・10、『吶喊』）の中の農民六一公公は、少年閏土と同じく、素朴な民の一人として登場する。以上のような民衆像は、挫折を体験した改革者の憤激の心情から見る麻痺した目覚めぬ民衆（愚民）と、それにもかかわらず中国改革を忘れることができなかった改革者の視点から見る、当為として想定された素朴な民、という枠組みを構成するものであったと思われる。それらの民衆の姿は、「『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長」（「『魯迅景宋通信集』二四」、1925・5・3、前掲）の過程を構成する一環としてあった。

*14：『反抗の原初形態』（ホブズボーム著、青木保編訳、中央公論社、1971・1・25）

*15：「離婚」（1925・11・6、『彷徨』）について、私は「魯迅『離婚』についてノート――魯迅の民衆観等から見る」（『言語文化論集』第29巻第2号、名古屋大学国際言語文化研究科、2008・3・31）で自分なりの見解を述べたことがある。

*16：初期文学活動（1903–1909）における魯迅の民衆観には、「精神界の戦士」（「摩羅詩力説」、第9章、1908発表、『墳』）に対する「愚民」があり、誤った指導を与える「志士」（「破悪声論」、1908発表、『集外集拾遺補編』）に対する「素朴な民」（「破悪声論」、前掲）が存在した。例えば、誤った指導を与える「志士」に対する「素朴な民」と比較すれば、ここでは「正人君子」に対する「下等人」（故郷の民衆）が対比されており、それは一層当時の現実に近づいた姿をとっていることが分かる。

*17：例えば、「在酒楼上」（1924・2・16、『彷徨』）の改革者呂緯甫は、辛亥革命の前後に人々の迷信に抗議するため廟の神像のひげを抜いた。そこには、活無常を含めて、民衆の迷信に対する抗議の意図があると思われる。また、「長明灯」（1925・2・28、『彷徨』）の常夜灯の火を消そうとする改革者（村人から狂人としてあつかわれる）に対して、迷信を信ずる村人（民衆）が批判と攻撃をしたように。

*18：『魯迅全集』第3巻（人民文学出版社、2005・11）の注によれば、包龍図

は、包拯（ほうじょう）（999–1062）のことで、北宋の仁宗のときの名臣。民間には包龍図に関する伝説が多い。

*19：「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』）では次のように言う。

「ただソビエト・ロシアにはすでにこの二種類〔旧制度に対する挽歌、新制度に対する謳歌――中井注〕の文学が生まれています。（中略）彼らはすでに怒り吼える時期を離れ、謳歌の時期に移っています。建設を賛美するのは革命が行われた後の影響です。さらにこれから進む情況がどのようなものか、今は知ることができません。しかし推測してみるとおそらく平民文学でしょう。なぜなら平民の世界は、革命の結果であるからです。」

この場合の「平民文学」は、1917年ロシア十月革命後の将来における労働者農民の文学（労働者農民の手になる文学）を予想していると思われる。「平民」を労働者農民、或いは労働者農民を中心とする庶民の意味で使用する例は、1927年以降にも見られる。「『新俄画選』小引」（1930・2・25、『集外集拾遺』）では、ロシア十月革命後の絵画に関して、「労働者農民大衆の平民」（原文、労農大衆的平民）と言及する。ここから、ソビエト・ロシアと関連して魯迅が「平民」を使用するとき、「平民」は上述の意味で使用されていると考える。

「プロレタリア文学について――昇曙夢氏の新著に序す」（ボリス・ピリニャーク、『無産階級文学の理論と実相』新ロシアパンフレット第7編、昇曙夢（のぼりしょむ）、新潮社、1926・7・6、魯迅入手年月日、1926・7・19、引用において、旧仮名づかいは新仮名づかいに、旧体字は新体字に改め、送り仮名はそのままとした）は次のように、ソビエト・ロシア社会の上層に立つものは労働者と農民であると言う。

「社会の各時代が文学の上に反映されるということ、また社会の中心を占め若くは国家の政権を掌握している階級がその理想を文学の上に反映するということは、間違いないことである。今日ロシア国政の枢機に参与し、ロシア社会の上層に立っているものは、言うまでもなく労働者と農民とである。随って現代のロシア作家が労農階級の気分とイデオロギイとを表現するのは当然のことであろう。」

また、「『文学と革命』序」（『文学と革命』、トロツキー著、茂森唯士訳、改造社、1925・7・20、魯迅入手年月日、1925・8・26）は次のように言う。

「革命はブルジュアジーを顛覆する。そしてこの決定的事実は、文学の中へも侵入するのである。（中略）いくらか精神的労作、殊に文学の領域に於いて生活的色彩を留めるものは、新しい指標を発見せんと試みた。今も尚こころみつつある。それの根軸となっているものは、抽籤に振い落されて退位したブルジュアジーに

代って現れたところの、『民衆（マイナス）ブルジュアジー』である。『民衆（マイナス）ブルジュアジー』とは一体何であるのか？まづ最初に農民階級を挙げなければならぬ。次に一部分は都市民衆の一団である。それから労働者である。」

しかし1927年以前、以後を問わず、魯迅は「平民」を一般の庶民の意味で使用している例も少なくない。その場合、多くは特権者、皇帝、貴族、士君子、官僚に対して、被支配階層としての庶民（小市民階級〈小資産階級〉、労働者、農民を中心として、ときには資本家階級を含めた）を指していると思われる。

また、五四時期において周作人によって提唱された「平民文学」（1918・12・20、『毎週評論』第53号、1919・1・19）における平民文学は、人類の普遍的精神を尊重し、真摯な思想と事実を語るものとされている。これは旧文学・旧派文学に対して新文学の理想を述べる性質のものであると思われ、性格の異なる「平民」であると思われる。

*20：「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』）の当時、魯迅は基本的に有島武郎の「宣言一つ」（『壁下訳叢』〈上海北新書局、1929・4〉所収）と同じ考え方をとっていたと思われる。すなわち、自分は労働者階級に属するものではなく、また労働者階級になることもできない。ゆえに現在自分の行う役割は、矛を翻して自らの属する階級を批判・攻撃することである。私はこれを、労働者階級との自己限定的連帯と言った。この点について、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」（『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、のち『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第10章として所収）で論じたことがある。

また、魯迅は「中山先生逝世后一周年」（1926・3・10、『集外集拾遺』）で次のように言う。

「彼〔孫中山を指す――中井注〕は一人の全面的な、永遠の革命者である。行うところのどのことであれ、すべてみな革命である。後世の者がことさらにいかに彼の欠点を詮議だてし、冷ややかに貶めようとも、彼は遂にすべて革命である。なぜなのか。トロツキーは、何が革命芸術であるのか、かつて説明したことがある。たとえテーマが革命を語っていなくとも、革命の産みだした新事物から取りこんだ意識の、一貫しているものがあること、これである、と。さもなくば、たとえ革命をテーマとしていても、革命芸術ではないのである。」

魯迅は孫文という優れた革命人を念頭に置きつつ、彼が「一人の全面的な、永遠の革命者」あるから、何を行おうと、それはすべて革命だ、と言う。この論理を平民文学に当てはめれば、平民文学（労働者農民の文学）とは、平民（労働者農民）であってこそ書くことができるもので、平民となることができない平民以

外の者は、書くことができないものとなるであろう。

こうした考え方は、茅盾の「現成的希望」(『文学』週報第164期、1925・3・16)にも見られる。茅盾は次のように言う。

「無産階級の生活を描く文学は、近代のロシアの諸作家――とりわけてはゴーリキーから――確立した。しかし英国のディケンズは、早くから無産階級の生活を描くたくさんの小説を書いていた。(中略)ディケンズの小説を読むと、作者は元もと無産階級の人ではなく、傍らに立って大声で、『見てみなさい、無産階級とはこう、こういうものですよ』と言っているにすぎないと思う。しかしゴーリキー等の作品を読むと、読者は貧民窟に入り、目の当たりに彼らの汚れたぼろを見、彼らの呻吟と怨みを聞くかのようだ。(中略)ゴーリキーは自らが無産階級であり、少なくともかつて無産階級の生活を経験したことがあるからである。」

*21:『魯迅景宋通信集』(湖南人民出版社、1984・6)の1926年、27年の部分を読むかぎり、魯迅と労働者・農民との直接的交流はほとんど見られない。

*22:「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、のち『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第10章として所収)で、この点について論じたことがある